初めての巡検で痛切に感じたのは，観察力のなさであった。自然地理の勉強の必要，特に感じた。ゲーテは，〝知らないこととこそ重要で，知っていることは役に立たない〟と述べているが，あまりにも知らないことが多い私は，この言葉に勇気づけられる一方，それを実感として理解することのむずかしさにぼう然となってしまう。　　（２学年　長谷川記）

那　　須　（松井教官）

１９６６年１０月１０日～１３日

松井先生の那須巡検は試験休みを利用して，１０月１０日～１３日の４日間にわたって行われた。上野から東北本線に乗るとすぐ，プリントを片手に，車窓からの勉強が始まった。

武蔵野末端ローム層，荒川後背湿地，大宮洪積台地とその土地利用景観等を見ながら。その後，利根川沖積低地から宇都宮台地に移行し，宇都宮から東方に向い種々の段丘を横切って箒木川を渡った後大田原浮石流の露頭を見，ここから那須盆地に入った。

１０日午後は日光街道を中心とした市街地を通り抜け，小泉・新屋敷付近の鹿島川の河岸段丘に至る。ここで那須野面と親園面の比高と揚水ポンプの分布を見た。さらに小泉南部の小丘陵の如き金丸高原の露頭で，ローム層，鳥の目礫層，大田原浮石流を観察した。

１１日はバスで箕輪まで行き，那須疏水や蛇尾川，熊川の扇状地特有の枯川をみた後，比高測定によって，高林面と折戸面の崖を追跡した。

１２日は大田原市より南にのびる街道沿いに約４Km程バスに乗り，水田の広がる地帯に出た。このあたりは水利に恵まれた地域なので，江戸時代から水田がよく発達している。それ故，処々に大きな構えの屋敷が見えた。

その後，青木の集落に入ったが，ここは明治９年３月に完成した水門によって，３４町歩が開田され，一面が水田となっている。

同日午後は那須野面と親園面の境界をはっきりさせるつもりで歩いたが，境界が明瞭な部分は，ごくわずかであった。

１３日は，旅館から南に下って中央道路の比高を測定した。この道路が傾斜しているのは，その基盤が傾斜しているためであるということが，側方からの測定によって判った。

又，那須野は緩傾斜地が畑に利用されていたが，かなり多くの礫を含んでいるのが見られた。又ここは，ほとんどが自給用作物であるが，とうがらしだけが商品作物として一面に栽培されているのが印象であった。

今回の巡検は主に比高測定によって段丘面の境界を明らかにすることに重点がおかれた。これは卒論で地形分類をするために非常に良い勉強になったと思う。　　（４学年　王城・西山）